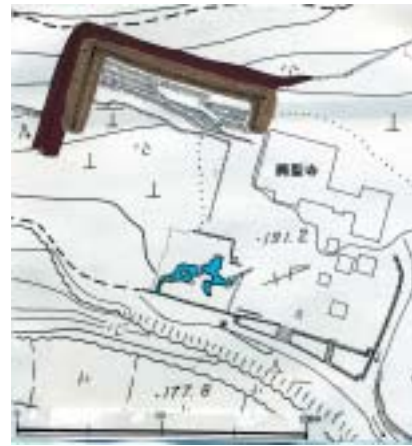


岩神館・旧秀隣寺庭園

名勝旧秀隣寺庭園は、現在興聖寺の境内にあります。興聖寺、秀隣寺、岩神館の関係は少々複雑です。

興聖寺は、僧道元が近江守護佐々木信綱に建立を勧めたのが始まりといわれる寺院で、元は安曇川対岸にありましたが、江戸時代に大火に遭い、朽木氏ゆかりの秀隣寺のあった現在地に移ってきました。秀隣寺は、朽木宣綱が、慶長十一年（一六〇六）に正室の菩



岩神館跡と旧秀隣寺庭園位置図

提を弔うために、かつて岩神館のあった地に建立した寺院です。

享禄元年（一五二八）の秋、室町幕府一二代将軍足利義晴が、京都の兵乱を避け、朽木植綱を頼りこの地に身を寄せます。この時、植綱が將軍のために造営したのが岩神館で、館内に造られたのが、現在残る庭園です。ですから、この庭園は、正しくは「岩神館庭園」と呼ぶべきかも知れません。

館の遺構は、かなり改変を受けていますが、いまなお、寺院墓地の背後に巨大な土塁と濠に囲まれた堂々とした区画を見ることができ、その規模、構造は、南北約一二〇m、東西約九〇mの方形館と考えられます。將軍義晴はこの地に三年滞在し、一三代将軍義輝もまたこの地に身を寄せています。

岩神館の庭園を作庭したのは、当時の政治的な実力者であり、かつ風流人としても名高い管領細川高国と伝えられています。

庭園は、安曇川が形成した段丘の縁にあり、安曇川の清流、そしてその背

池の沢庭園跡

朽木谷には魅力的な遺跡が多く残されていますが、この「池の沢庭園跡」もその一つです。

眼下に流れる安曇川から二〇mもの断崖上に古い庭園の遺構が残っています。この地には「池の沢屋敷跡」という、後一条天皇（在一〇一六〜三六）



池の沢庭園跡遠景

や、朽木氏からむ貴人の隠棲伝説が残されています。

ここに池状の窪地があることは地元の一部では知られていましたが、昭和五五年に村道の建設が計画され、これに先立ち、測量調査と試掘調査がおこなわれました。

調査の結果、地表面で観察された窪地は南北に細長く、弓状に緩く曲がった汀線をもつ三角形に近い形の、人為的な池の遺構であることが明らかになりました。池の規模は南北約八〇m、東西幅は南端で約七m、中央部で約二m、北側が最大幅で約三二mという大規模なものです。

池の中央北寄りに、東西三m、南北六m程の中島が見られ、島の南端には景石が据えられています。また、池の西岸南部から、直径一〇〜二〇cmの川原石を敷いた州浜状の汀線や景石が見つかりました。

この庭の造られた年代は、石敷きの間から一三世紀前半頃の中国産青磁の破片が見つかったことから、鎌倉時代



旧秀隣寺庭園

後に横たわる蛇谷ヶ峰を借景としています。池泉鑑賞式の庭園で、左手の築山に組まれた「鼓の滝」から流れ出た水は池に注ぎます。曲水で造り上げた池泉には石組みの亀島、鶴島を浮かべ、中央付近には見事な自然石の石橋を架けます。随所に豪快な石組みを配する、全国屈指の武家の庭です。土塁で囲まれた防衛空間の中に造られたこの庭は、単なる鑑賞のための庭ではなく、將軍の公的な権力を示すための儀礼の場に不可欠な舞台装置として造られたとも、考えることができます。

の作と考えることができます。

高島七頭の祖佐々木信綱が朽木地頭職に任ぜられたのが承久の乱（一二二二）の功によるとされていますので、この庭は、佐々木氏が朽木谷に勢力を及ぼし始めて間もない頃に造られたとすることができそうです。

いずれにしても、この遺跡は、高島七頭に関する最も古い遺跡の一つであるばかりでなく、全国的に見ても事例の希な鎌倉期の庭園として貴重であり、精確な調査と、適切な保護の措置が講じられる必要があります。

幸い、

村道は庭園を避けて建設され、今も森林の中にこの庭の跡をたどることができま



今も残る池状の窪地